



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(2020.12)令和2年度:

認知症高齢者とのコミュニケーションにおける看護師の工夫に関する文献検討

鳥井 紅里 原田 悦可 宮地 薫
(指導: 児玉 真利子)

諸言

認知症高齢者の割合は、2025年には65歳以上の人口の1/5になるとの推計もあり¹⁾、高齢化に伴い認知症高齢者を看護する機会は増えていく。看護におけるケアリングでは、患者とコミュニケーションをとることで患者のニーズを認識し、充足への援助を行っていく²⁾。しかし認知症高齢者においては、言語的コミュニケーションによるニーズ把握が困難な場合が多く、真のニーズに即した看護を行うことが難しい。

認知症高齢者のニーズ把握に関する先行研究では、治療選択や看取りにおける意思決定支援の研究は多く見られる³⁾⁴⁾。しかし日常的なケアを行う上でのコミュニケーションに焦点をあてた研究は少ない。

本研究は、日常的なケア場面での認知症高齢者の真のニーズを引き出すために必要な、コミュニケーションにおける看護師の工夫について明らかにすることを目的とした。

用語の定義

- ・コミュニケーション: 認知症高齢者の真のニーズを理解するための言語・非言語的コミュニケーション
- ・認知症高齢者の真のニーズ: ケアを受ける認知症高齢者の意思や本音
- ・看護師の工夫: 認知症高齢者の真のニーズを引き出し、アセスメントするために必要なコミュニケーションにおける看護師の着眼点や取り組み

方法

研究対象: 医中誌 web 版を用いて、「認知症」and「意思疎通」or「ニーズ」or「困難」or「アセスメント」or「自己決定」をキーワードとし、原著論文に限定したところ合計 188 件ヒットした。選定基準は、幅広く知見を得るため①文献の出版年、ケアの提供の場は限定しない、②認知機能の程度は意思疎通がcaろうじて可能なものを含む、③認知症高齢者の日常的なケアを行う上でのコミュニケーションについての記述を含む、④研究フィールドが精神科病棟のものは除外する。これらを満たす 10 件の文献を抽出し、更にハンドサーチした3文献を追加し、計 13 件を研究対象とした。

データ分析方法: グレグら⁵⁾の方法を参考に、各文献から認知症高齢者への看護師の関わり方やコミュニケーションに関するアセスメントを抽出・コード化し、類似性に沿ってサブカテゴリ化・カテゴリ化した。内容の抽出は3名の研究者の討議、教員の助言により著者の意図する意味内容を変えないように分析を行った。

倫理的配慮: 本研究は先行研究に基づく研究であり、引用・参照した文献の出典を明示する。

結果

13 対象文献から 96 コード、21 サブカテゴリ(以下、〈 〉で示す)から、計8カテゴリ(以下、【 】で示す)を抽出した(表1参照)。

表1 認知症高齢者とのコミュニケーションにおける看護師の工夫

カテゴリ	サブカテゴリ (コード数)
コミュニケーションを円滑に行うための技術	コミュニケーションのための技術(身振り・視線を合わせる・スキンシップ)(8)
	視界に入り対面し、関心を引きつける(7)
	説明の理解を促す工夫(4)
発言や置かれた状況の受容・共感	話に耳を傾け共感する(4)
	対象の身になって考える(4)
適切に表現されないメッセージへの気づき	うまく言語化されないメッセージに気づく(9)
	問題行動とされる行動の理解(9)
	表現されない身体的要因を捉える(4)
本人への意思の確認	意思疎通のタイミングをはかる(3)
	本人への気持ちの確認(3)
	中核症状による影響の理解(3)
その人らしい生活を送るための情報の把握	生活歴・価値観の理解(6)
	これまでの環境・人・物への関わり(4)
	対象を尊重した関わり(3)
安心感を与える関わり	笑顔・呼名・挨拶による心地よい関わり(6)
	安心感を与える応答や働きかけ(3)
	会話・活動・ケアに好みをとりいれる(5)
快感情の増加につながる関わり	家族との会話を増やす(2)
	他者との会話を増やす(4)
穏やかに過ごせる居場所の確保	穏やかに過ごせる居場所を捉える(3)
	生活環境への配慮(2)

考察

得られた結果を以下の項目に分類し、考察する。

1. コミュニケーションの技術に関する工夫

【コミュニケーションを円滑に行うための技術】は、身振り・視線を合わせる・スキンシップなどの〈コミュニケーションのための技術〉、〈視界に入り対面して関わり、関心を引きつける〉〈説明の理解を促す工夫〉から形成された。看護師から対象に話しかける際のタッチングやアイコンタクトといったコミュニケーション技術は、バリデーションにおいても活用され、言語的コミュニケーションが次第に困難になっていく対象との意思疎通をかなり後期まで継続するのに有用といわれている⁶⁾。このことから非言語的コミュニケーション技術を活用して、対象に関心があることを伝え、意思疎通の方法を工夫することが必要であると考えられる。

【発言や置かれた状況の受容・共感】は、〈話に耳を傾け共感する〉〈対象の身になって考える〉から形成された。ケアの場面においてゆったりとした穏やかなアプローチや対象の感情を敏感に受け止めることは、対象の現状の理解に有効であり、言葉の用い方を配慮することでコミュニケーションを促進し、不安や興奮を予防できることが示唆されている⁷⁾。受容や置き換え・共感、対象の言動の背景にある感情を理解する上で重要であると考えられる。

【適切に表現されないメッセージへの気づき】は、

〈うまく言語化されないメッセージに気づく〉〈問題行動とされる行動の理解〉〈表現されない身体的要因を捉える〉から形成された。攻撃的行動を表出する認知症高齢者は欲求不満や怒り、自己防衛、不安、寂しさという意味がその内にある⁸⁾。看護師はこのことを踏まえ、自身の感性を磨くとともに、対象の言動の背景にある感情や欲求を理解するために様々な視点をもつことが必要であると考え。

【本人への意思の確認】は、〈意思疎通のタイミングをはかる〉〈本人への意思の確認〉から形成された。「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン」⁹⁾では、普段から我々一人ひとりが自分で意思を形成し、それを表明でき、その意志が尊重され、日常生活・社会生活を決めていくことが重要であるとしている。治療の意思決定だけでなく、日常的なケア場面においても対象の意思を直接確認することが必要であると考え。

【その人らしい生活を送るための情報の把握】は、〈中核症状による影響の理解〉〈生活歴・価値観の理解〉〈これまでの環境・人・物への関わりの理解〉から形成された。陳¹⁰⁾は、認知症になる前の生活リズムを尊重し維持することや、発症による変化を重視することが対象を尊重し、その人らしい個性を保証することに繋がると述べている。対象の価値観をこれまでとの繋がりに理解し、生活の継続性を尊重することや、生活情報からできることを伸ばす、できそうなことを見出すアセスメントが重要であると考え。

2. コミュニケーションを円滑に行うための前段階の工夫

【安心感を与える関わり】は、〈対象を尊重した関わり〉〈笑顔・呼名・挨拶による心地よい関わり〉〈安心感を与える応答や働きかけ〉から形成された。増尾¹¹⁾は、ケアする側の働きかけ方やコミュニケーションが取れているか否かによって、認知症高齢者の心理的安定感が左右されると述べている。すなわち、安心感を与える関わりは心理的安定感を増し、円滑なコミュニケーションから心地よい生活援助に繋がると考える。

【快感情の増加につながる関わり】は、〈会話・活動・ケアに好みをとり入れる〉〈家族との会話を増やす〉〈他者との会話を増やす〉から形成された。楽しい交流であるコミュニケーションは脳の刺激となり、脳を活性化することが示唆されている¹²⁾。楽しく会話をする機会を増やし自己表出の場を作ることは、真のニーズを引き出すための感情表出の増加に繋がると考える。

【穏やかに過ごせる居場所の確保】は、〈穏やかに過ごせる居場所を捉える〉〈生活環境への配慮〉から形成された。陳¹³⁾は、認知症高齢者のケアアセスメント視点に関する研究の中で、“居心地の良い場所を確保することに気をつける”などの項目からなる「快の環境整備」の因子を抽出している。認知症高齢者の心身が安定する居場所を整えることは、コミュニケーションを促進し、真のニーズを引き出す上で重要であると考え。

結論

認知症高齢者の日常生活における真のニーズを引き出すためには、言動の背景にある感情を理解するための言語的・非言語的コミュニケーション技術の工夫や、その人のペースや生活史を尊重した関わりが重要である。更に、コミュニケーションを円滑に行うための前段階の工夫として、心身の安定を確保し、穏やかに過ごせる生活環境を整えることの必要性が示唆された。

引用・参考文献

- 1) 内閣府(2020-5-12):3 高齢者の健康・福祉 2019 高齢社会白書, https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-17/html/gaiyou/s1_2_3.html.
- 2) 小山眞理子(2012):看護学基礎テキスト第4巻 看護の機能と方法, 24-29, 日本看護協会出版会.
- 3) 奥村朱美, 内田陽子(2009):介護老人保健施設入所中の認知症高齢者のニーズの特徴, 老年看護学, 13(2):97-103.
- 4) 齋藤多恵子, 石橋みゆき, 山下裕紀 他(2019):急性期病院の認知症高齢者の退院支援過程において退院支援専門看護師が行う倫理的意決定支援, 千葉看護学会誌, 25(1):47-56.
- 5) グレグ美鈴, 浅原さよみ, 横山美江編(2017):よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートを目指して, 第2版, 医歯薬出版.
- 6) 北村育子(2005):痴呆症の高齢者の心理社会的ニーズを理解するためのツールとしてのバリデーションの有用性について, 社会福祉, 45(3):53-63.
- 7) 小松光代, 岡山寧子(2007):認知症高齢者とのコミュニケーションに関する海外文献の検討, 京府医大看護紀要, 16(1):9-19.
- 8) 日本認知症学会編集(2008):認知症テキストブック, 64-80, 中外医学社.
- 9) 厚生労働省(2017):認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン.
- 10) 陳麗娜(2017):認知症高齢者ケアにおけるケアアセスメント視点に関する検討, 日本認知症ケア学会誌, 16(3):659-669.
- 11) 増尾由紀子(2011):認知レベルが低下しつつある高齢者にかかわる看護学生のケア評価—パーソン・センタード・ケアとDMC法を用いての実際—, 帝京平成看護短期大学紀要, 21(1):23-26.
- 12) 前掲書 11)
- 13) 前掲書 10)

研究対象文献

- 岩本由美子(2016):多様な認知症の症状を呈した入居者へのケアプロセスの一考察, 認知症ケア事例ジャーナル, 9(1):12-1.
- 木下香織, 太湯好子(2011):看護師が関わりに困難を感じる認知症高齢者との対人交流場面の様相, 新見公立大学紀要, 32:31-42.
- 小林あずさ, 伊藤まゆみ, 青柳直樹 他(2008):認知症高齢者にプラスの変化を与えたケア場面における看護師の対応の特徴, 群馬パース大学紀要, 6:127-133.
- 小名留美, 柴田幸枝, 内田陽子(2009):訴えを繰り返す認知症高齢者の真のニーズの探究 プロセスレコードによる分析, 看護技術, 55(13):1445-1450.
- 前田恵里(2010):コミュニケーションに障害をきたしている認知症高齢者の看護, 認知症ケア事例ジャーナル, 3(3):258-265.
- 松永美輝恵, 井関智美(2004):認知症高齢者のコミュニケーション量と感情の分析, 新見公立短期大学紀要, 25:171-177.
- 島村敦子, 松浦志野, 石垣和子(2012):認知症高齢者の気持ちに気づくことから訪問看護師による入浴ケアが定着した一事例, 認知症ケア事例ジャーナル, 5(2):103-112.
- 信藤由衣, 丹羽綾香, 三浦由佳 他(2012):コミュニケーションの指標としての「機嫌」脳機能障害の1事例報告, 三重看護学誌, 14:91-95.
- 杉山智子, 松井典子, 深堀浩樹 他(2008):アルツハイマー型中期認知症患者へのADLケアに対する抵抗時におけるケアスタッフのかかわりの特性, 医療看護研究, 4(1):1-9.
- 諏訪さゆり, 吉尾千世子, 瀧断子 他(2001):痴呆性高齢者の言動の意味の分析—その人らしさを尊重したケア技術確立に向けて—, 東京女子医科大学看護学部紀要, 4:11-18.
- 田中敦子, 大越扶貴(2008):重度アルツハイマー型認知症高齢者の表情と見る動きに関する調査研究 介護老人保健施設入所中のシングルケースの分析, 埼玉県立大学紀要, 9:55-62.
- 植田洋子, 海段小百合, 佐々木秀美(2009):一般病棟における認知症高齢患者の行動障害把握に関する取り組み センター方式を利用して, 看護学統合研究, 11(1):2-19.
- 内田陽子, 上山真美, 小泉美佐子(2008):看護学生の実習前後における認知症高齢者のアウトカム判定とケア実施率の関係, The Kitakanto Medical Journal, 58(3):303-309.